

# 死刑判決に至るまでのカフカ

ある詩人の「絶望」に至る過程

古 井 由 吉

前世紀の後半より今世紀にかけて「詩人」(Dichter)なる言葉に異常に高い精神的意味を与えたものは、詩人の自己意識をめぐるの苛酷な苦行だった。孤独の内部において、詩人は自己の生の多様性よりひとつ不変な自己についての意識を抽出し、これに彼の全的な生を挙げて奉仕し、一般の人間達が曖昧に人間的なと呼んでいるものへの配慮によってもその奉仕を妨げられなかった。そのようにして、「詩人」は唯一にして、永遠な存在としての自己像を彼自身の死後に残そうとするのである。

フランツ・カフカ(1889~1924)もそのような詩人のイデーを追求した作家達の一人であった。現代社会の勤務生活者として(カフカは労働災害保険局の局員だった)様々な障害に詩人的欲求を嘲弄され、また紛らわされながら、なおかつ彼は独特な執拗さをもって、自己の生をひとつの不変な意識へと詩作(dichten)しようという試みを生涯にわたって繰返した。そして、その間に詩人的な欲求と詩人的現実の喪失との矛盾について様々なイロニーが彼によって表白されたが、トーマス・マンの如く自己を作家(Schriftsteller)として限定する事は彼にはなかった。例えばカフカの日記は同時に習作ノートであり、その中において日々の個人的な記述と詩作の修業とは互にほとんど区別がつかないものであった。また、彼の主要な作品の幾つかは彼自身のまだ日の浅い体験のきわめて直裁な形象化であり、特に「審判」と「城」においては主人公達はKなる頭字のみを名に与えられ、彼らが彼らの追求の途上で出会する女性達はその頭文文字を、当時カフカに深刻な体験をもたらしたある女性の名前より与えられている。さらに父親や愛人へあてた手紙において、カフカは孤独の中で育てたネガティブな自己像を、彼と直接に生を触れ合っている人間達に対して容赦なくつきつけた。父親に対しては、父親の影響によってもはや救われ難い不幸な存在へと定められてしまった自分の姿を、情熱的に彼に迫る女性に対しては、「不安」と婚約していてもはや如何なる愛にも答えられぬ自分の姿を、カフカは幾様もの鮮やかな比喩をもって表現した。

しかし、この様な事柄に見られる容赦なき自己意識への密着に、厳しい「絶望」に反して、「審判」や「城」の主人公達は自己の本質を意識し続ける事を独特な風に妨げられている。彼らはいはば絶望の品位をいさゝかも持たず、願望に

繰返し駆り立てられては、自己を見失う。そして、カフカはそのような自己喪失の不安と笑しさを表現することに著しい力と関心を持っていた。それでは、「審判」や「城」の主人公達における自己喪失と、例えば手紙におけるカフカの苛酷な自己集中とは如何にして統一されるのだろうか。しかも、この両者はカフカの婚約破棄という同じ体験より生じたふたつの自己把握の表現であった。

1912年、カフカが29才の秋、短篇小説「死刑判決」(Das Urteil)が一夜のうちに一気に書き上げられた。それはカフカの数年にわたる「書く事の不能」における低迷の後、突然彼に成功した作品であり、真にカフカ的な文学へと最初の道を開いた作品であった。それより以前すでにかなり若い頃から作家への志を立てていたカフカは多数の断片的な試みをなしており、その中には「ある斗争の記録」など後に20世紀始めにおける精神(Geist)の体験の記録として重要視されるに至っているものがある。「生きる事が不可能であるという事の証明」というある章の副題が青春時代のカフカの創作態度をよく表わしている<sup>(1)</sup>。すなわち、世紀末より受け継いだペシミスティックな思想と、彼自身の内にある生への不安の感覚と、さらに市民的な現実崩壊の体験に導かれて、彼は彼の「不幸である事」<sup>(2)</sup>(Unglücklichsein)の意識を幻想的に、また同時にかなり論理的に形象化しようとした。1人の男が内面的に構成された夜景の中を歩みながらモノローグし、モノローグにつれて夜景が移り変る。あるいは、同じ様な風景の中を2人の男が歩み、ほとんど互に孤立したモノローグに過ぎぬ対話をかわす。日常的なものが幻想的なものと頻繁に交換し合い、自明なものが唐突として恣意へと陥落し、カフカは現実の崩壊について、崩壊における人間の不安な自由について、異常に豊かな感覚と発想と形象を見せている。ところが、このような豊かな才能の駆使の果に彼は根深い「書く事の不能」に陥り、そこで彼の豊かな発想が彼の実際の生と如何に関係づけられて把握され得るのか判らぬ自分を見出したのである。

それに対して「死刑判決」においては、主人公ゲオルク・ベンデマンはカフカと同じように父親の影響の下で喘ぐ男であり、当時のカフカがすでにそうであったように結婚を前にして甘美な物思わしさに耽る男であり、小説の成立後およそ2年でカフカが実際に体験する事になったように結婚を目前にして唐突として不条理な力によって「死刑判決」を下されるのである。そこには無邪気な願望によって常に見失われる自己の罪、不安、突然下される罰という、後の「審判」や「城」の基調となったテーマが含まれているばかりか、作品そのものが後のカフカの婚約破棄という体験の予言にすらなっている。つまり、「死刑判決」においてカフカは罪ある存在としての自己についての意識を定着し、それを婚約という体験を通じて貫いたのである。「死刑判決」はカフカによ

て「正式の誕生」(Die regelrechte Geburt)を認められた最初の作品であった。

しかし、ある作家がある自己についての意識に始めて到達するというのは、後の作品や回想によって説明される程に自明で、必然的な結果ではない。そこに至るまでに作家は様々な現実喪失や恣意の危険に触れながら、空虚の中を模索するのである。カフカの場合も、人々が「死刑判決」の成立を説明するのに使う彼の生の現実——父への関係や罪意識——についての記述は「死刑判決」以前の日記においてほとんど見出せない。「死刑判決」はむしろカフカが語った通り、自己意識の空白の真只中より一気に把み取られたものであり、後の自己意識を育てる最初の核となったものであった。それでは、それは如何なる空白だったのだろうか、そして如何にして最初の核はそこより得られたのだろうか。

「死刑判決」の書かれた夜より2年余り前、1912年の始めに、後にカフカの日記として出版される事になった四つ折半ノートが始まった。それは単に新しいノートの始まりという偶然なものではなく、カフカの危機意識の高まりと時を同じくしている。すなはち、当時すでに27才にもなり、相変らず勤め人として、また息子として「非生活」を送りながら、文学においてのみ真の生活の打開を期待していたカフカは肝心の文学において甚々しい「書く事の不能」に突き当たり、何時果てるとない低迷を続けていたのである。彼を苦しめたものは一方においては精神の揺がし難い冷淡さ、空虚への陥落であった。彼は自分の状態をもはやどんな感情も想念も受け容れる隙間のない石にたとえた。しかし、それと同時に、それ以上に彼を苦しめたのは彼をしばしば襲うインスピレーションの異常な豊かさ、彼をして今こそ何でも書き得るとほとんど確信させるような豊かさであった。というのは、それらの想念や形象は彼自身による把握を許さないのである。彼の表現を借りると、それらはその根元のほうから彼に確認されつつ彼の内に入って来るのではなくて、いきなりその真中のあたりから、最も生々しいあたりから彼の内に飛び込んで来るのである<sup>(3)</sup>。このような豊かさは確かにカフカに作家としての可能性を示しはした。しかし、それは当時において彼の心を占め始めていた願望を、すなはち、言葉を自己で充満させ、言葉において自己を確認したいという願望をいさゝかも満す事が出来ず、豊かさのまゝやはり彼には不幸な空虚として感じられた。

こゝでカフカが陥っているのは自己喪失の状態である。「僕の状態は幸福でもなければ、不幸でもない、冷淡さでもなく、弱さでもなく、疲れでもなく、また他の関心事でもない。それじや一体何だというのだ。それが判らぬということが書けぬ事に関係しているに違いない<sup>(4)</sup>」と彼は嘆いている。すなはち、中心にあるべき自己の現実が見失われている故に、彼は自身の豊富な想念や形

象に意味の秩序を与えることが出来ないのである。しかし、このような豊かさそのものはカフカの内に於いてある自己についての意識がまとまりかけている事を意味している。それは彼の青春時代を通じて追求されて来たネガティブな自己についての、つまり「生きる事の出来ぬ」自己についての意識であり、そしてこの意識の凝縮がカフカにあるペルスペクティヴを与え、今まで眼につかなかった事どもを次々に見えるようにさせたのである。カフカは机に向っている彼自身を、広場の真中で両脚を折って倒れている男の状態にたとえた<sup>(5)</sup>。車は倒れている男には構いなしにひっきりなしに男の周囲を往来し続ける。しかし、男の激しい苦痛は彼の眼を閉じさせる事によって「交通巡査よりもっと巧みに」あたりに秩序を与える、つまり、あたりを荒涼としたものにしてしまう。こゝで起ったのはネガティブな自己への集中によるペルスペクティヴの獲得と同じものである。ところがカフカはこのようにして彼の内に生じた精神的秩序を彼の現実として荷う事を拒否したのである。彼は先の比喩に次のような結びをつけた。「あたりのにぎやかな生活は彼を苦しめる。何故って、彼は往来の邪魔なのだから。しかし、空虚はもっと悪い。空虚は彼の本来の苦痛を失わせてしまうのだ。」すなはち、カフカはネガティブな自己意識が彼の内で遂に凝縮しかけた時にはすでに現実を喪失し、虚無へと崩壊し始めているのに気づいたのである。

しかし、こゝに起ったネガティブな自己意識の崩壊は、「絶望」があまりに徹底的な精神化によって最初に存在した体験の現実を失ってしまった事を意味しない。それは精神化の、自己意識の抽象のもっと押し進められた段階において生じる問題である。ところが、カフカの場合には崩壊は精神化がよいよい厳しい第一歩を進めようとした時にすでに起ったのである。カフカの自己意識を崩壊させたのは、むしろ最初における「絶望」の弱さであった。すなはち、彼の多様な生の現実において不幸であらざるを得ない存在としての自己を十分に体験する事なく、ネガティブな自己の構成に向った事であった。それ故、ネガティブなものへのいよいよ冷やかな密着もカフカにおいては無邪気な「願望」の跳梁をすこしも抑え得なかった。そして、「願望」は彼がネガティブなるものを全的な生を挙げて荷う事を妨げ、ネガティブなるものも「願望」の跳梁を許す事によって自ら現実性を失うのである。

カフカが書けなくなったのはこのような「絶望」と「願望」の白々しい共存、あるべき葛藤の失われた膠着の故であった。このような彼の精神状況は日記の始まり近くになされた「ある斗争の記録」のひとつのヴァリエーションといわれる「Bauernfänger」の試み<sup>(6)</sup>にうかがわれる。

「私は榮達の願望を抱いて田舎より都会にやって来るが、「正しい人々」の処へ道を通じる前に都会の「独身者」に出会ってしまい、暫くつき合っている

うちに彼によって自分の不幸な本質を目覚めさせられ、彼から離れ難くなる。「独身者」とは世界から自己を孤立させた事によって正しい現実感覚を奪われてしまい、何処へ行こうと同じ事だと都会の汚物の中に横たわる男である。「私」はこの男の現実喪失に感染されて、すでに最初の願望の素直さを失いかけている。小説の場面は、丁度「私」が「独身者」につきまとわれながらようよう「正しい人々」の集りが催されている建物の前まで来て、彼と共に階段の下の暗がり立っている処である。今こそ「独身者」と訣別する潮時なのである。「私」はどうしても「独身者」を振り切って、必要とあらばトンボ返りを打ってさへ階段を昇り、集りに仲間入りしなくてはならないと考える。何故なら、集りにおいて「私」にすべてが約束されており、一步そこに足を踏み込みさへすれば「私」の一切が改善される、と「私」は信じるからである。「私」が是非とも必要だと考えているのは逃走であった。成程、「独身者」は彼の本質に従ったのに過ぎないと「私」は認める。しかし、「独身者」は自分の不幸な本質に気づいたその時、取り返ししのつかぬ誤ちを犯したのだ。すなはち、「逃げ出す事のみが彼をこの世界において真直に保つことが出来る」というのに、彼は逃げ出さずに、自分の不幸の中へ長々と寝そべってしまったのだ。そう「私」は彼を非難して、誤ちを二度と繰返さすまいと思う。しかし、それにも拘わらず依然として「私」は彼を振り払う事が出来ない。彼は「私」を引き止めるどころか、「こゝより上のほうがいいと思うなら、遠慮なくすぐに昇って行き給え、私のことなど考えずに昇って行き給え」と促しさへする。それなのに、「私」は決着をつけかねて、玄関前の暗がりでは彼と果しのない問答を続けるのである。

この「私」こそ「独身者」に映った自己の本来の姿を前にして、すなはち、「絶望」を前にしてなおかつ何処かへ走り去ろうとする「願望」を著わしている。しかし、その「願望」は自分自身の正当さをすでに十分に確信していないので、逃亡の試みは真剣な決断を欠いて、むしろ果しない、笑止な戯れに見えざるを得ない。しかもまた、「独身者」のほうも真の「絶望」における精神の高貴さを持たず、ただ自己のネガティヴな本質に冷やかに耽っているのみである。そして、彼は「私」に「私」の本質を示して「絶望」を迫るのでもなければ、また「私」を完全に解放するでもなく、ただ黙々と「私」について来るのである。それ故、この両者の間のやりとりには如何なる展開も結末もあり得ず、そもそも本来の意味で対話になり得ないのである。こゝにカフカの書けぬ原因があった。すなはち、カフカはすでに大きく育ちつゝあったネガティヴな自己意識と、それによって一向に弱らぬ願望との間で、自己を把握する事に迷っていた。そして、それが小説の試みにおいてあるペルスペクティヴを立てる事を、特に主人公の位置を定める事を不可能にしたのである。カフカの日記

はこのような自己喪失の状態において、自己を何らかの方法で把握し直さねばならぬという必要より始まった。そして、「死刑判決」が書かれるまでの2年余りの間はカフカの生涯のうちで日記の分量の最も多い時期であった。

カフカ自身の表現を借りれば、日記において彼は毎夜、丁度人々が当時地球に接近しつつあった彗星に望遠鏡を向けていたように、遠く紛れた自己に向けて文章を書き、何時か真の自己が姿を現わすのを促そうとしたのである。しかし、それは多くの詩人達や思想家達の場合の様に、意識の展開の為に自由な時間を豊富に許された精神的追求ではなかった。すなはち、その間ずっとブラックの労働災害保険局に勤務していたカフカは精神的生活を勤め人の生活のプログラムに無理にも合わせる事を要求され、その結果、多くの都会人と同じく精神の営みを切れ切れに中断されるという苦しみをなめなくてはならなかった。そして、遂には彼は自分の意識がたったひとつの文章を包括するに足る程にも持続せず、完全に断片化してしまったと嘆かざる得ない程であった。しかし、このような悪条件のもとにありながら、詩人の自由のイデオロギイは独特な具合に固持されたのである。すなはち、世間に対する義務を支払った後、職務より解放された夜の時間において、始めて純粋な精神の自由が得られ、あらゆる体験を自分の内部より展開出来る、とカフカは信じたのである。カフカに取って勤務生活を選ばせたのも、また、カフカに文学以外の領域におけるあらゆる貧しさ——音楽を感受する事の不能、女性を愛する事の不能——を受け容れさせ、夜々書く事に集中させたのも、この確信であった。何時か孤独の中より真に彼を満足させる作品が生れ、彼の惨めな「非生活」を改善しなくてはならなかった。

しかし、この期間の日記のうち最も多い分量を占めるのは外面の事柄の観察の記録であった。様々な人間との出会、講演会、芝居、特に当時ブラックに滞在していた東ユダヤ人劇団の仕事やその俳優達との交遊、それらの事をカフカは事細く書きしるした。それは彼自身のペルスペクティーフを獲得しようという試みであった。しかも、あの広場に倒れている男のような、ネガティーフなものへの耽溺によって生じさせられたペルスペクティーフではなく、ゲーテの旅行記や伝記においてカフカを感嘆させたような、生々とした観察より自ら生じて来るものをカフカは求めていたのである。しかし、これらの観察の試みの成果は乏しかった。微に入って具体的な描写も後にカフカの特徴となった端的な表現へとまとまりかねて、それぞれ孤立し拡散している。そして、観察の記録が途切れる度にカフカは外への逃避よりもどって来て、相変らぬ空虚を内に見出した人間のように「何も書けぬ」という嘆きを繰返した。

これに対して日記において実際に試みられる事はほとんどなかったが、この時期におけるカフカの本来の関心が自叙伝、自叙伝的な作品に向けられていた

事は日記の処々に散在する記述よりうかがわれる。カフカがその成功に現在の生活の打開を期待した作品とはそのような作品であった。カフカは如何なる自叙伝を意図していたのだろうか。彼が実際に行った自叙伝の試みの例は次のようなものであった。すなはち、1911年の年末に、「巾広い、力強い想起によって生じる力の高まり。いはば、船跡のほうから自ら動き出し船尾に向っておし寄せて来るのだ。すると、いよいよ強力な効果をもって我々の力の意識は高まり、力そのものが高まる。」という記述について、二度にわたってかなり長い少年時代の回想が試みられている<sup>(7)</sup>。カフカはそこにおいて、日頃より彼を苦しめる劣等感、決断の不能を少年時代より厳然として存在していたものとして確認しようとした。劣等感に余りに深く親しんでしまった故、自分に関する事柄を適確に判断する能力を、就中、自分の惨めな現状を改善する能力を喪失してしまった少年の姿をカフカは描いた。少年は両親にあてがわれた不様な服を着て劣等感をしきりに育てながら、服装をかえて劣等感の原因を取り除く事に思いつかない。服装が彼においてのみそのような醜悪な効果を発揮するのだと彼は固く信じ込んでいるのだ。「私は新らしい着物を欲しいとは思わなかった。どうせ私が醜い姿をしているのなら、醜いままですくなくとも気楽に過したい。また、私の何時もの醜い服装を見慣れている人々の眼の前にまた新らしい服装の醜悪さを現わすことは避けたいと思ったのだ。」

こゝには外的な状態の「改善」によっては揺がし得ぬ、不幸な自己についての濃厚な意識がある。カフカが試みたのは再び不幸な存在としての自己の把握であった。しかも、今までは劣等感や疎外感やあるいは現実崩壊のイメージへの節度なき密着に過ぎなかったものを、カフカは幻想を離れた過去の回想によって真の「絶望」として確認しようとしたのである。それは回想によって過去を精神化し、過去、現在、未来をその内部において統一するひとつの不変な自己像を得ようという試みであり、生を詩的形成(dichten)する詩人の苦行の第一歩であった。

しかし、カフカはそれにほとんど成功しなかった。成程、外的な事柄には揺がされぬ自己意識がそこには描かれている。しかし、それはむしろ否定的な面より強い光りをあてられているのである。すなはち、「絶望」の正当さが強調されるのではなく、劣等感へ密着した心の非人間的な冷やかさと揺がし難さ、それによる現実感覚の喪失の笑止さのほうにむしろ強い効果をもって描かれている。そして、その効果は「絶望」が相変らず生々とした「願望」と常に対比されて眺められている処より来るのである。この様な効果はそれ自身書かれたものに対するカフカ自身の疑いを意味している。そしてこの自叙伝の試みは中断し、「死刑判決」が書かれるまで自叙伝的試みは二度となされていない。

ところで、カフカの自叙伝的試みが成功しなかった原因は、彼の求める自叙伝のイメージが根本において分裂していたという事の中に始めから含まれていた。すなわち、カフカは「絶望」を確認しようという意図を明瞭に抱いている一方、ディケンズ的な物語、新しい生活を求めて単身新世界に渡る純情なカルル・ロスマンの物語<sup>(8)</sup>をも思い描いているのである。カフカにとって自叙伝という言葉はすでに先に見たようなベシミスティックな内容とはうらはらに、ひとりの「罪なき」人間が様々な迫害に虐げられながら遂に世界における自己の位置を獲得するという、自助的な人間の苦闘をも意味していた。カフカはその様な苦闘談の世界より精神的に決して縁遠くはなかった。彼のディケンズやB・フランクリンへの関心はそれを示しており、また、彼自身の父親は実際に彼の生活をゲッターに近い処よりプラークのドイツ人的市民の水準にまで自力で引き上げて来た男であって、カフカは幼い頃より父親の苦闘談を苦痛な程に聞かされて来て、恐らく彼の人生とかロマンについてのイメージをそれによって影響されていたに違いないのである。さらに、カフカが文学に求める本来のものもやはり同じような二重性を蔵していた。彼はすでに幼い頃より現在に至るまで彼が求めて来た作品を次のように確認している。「一語一語私と結びついている描出 (Darstellung)。私はそれをこの胸に抱き締める事が出来、そしてそれは私を現在ある処より拉し去ってくれるような描出。」すなわち、カフカは書くことによって不変な自己が確認される事を望み、そして同時にそれによって自己の惨めな状態が一気に改善されるのを望んだのである。この後者の願望はカフカが自叙伝的作品を求めていたこの時期において特に著しい。彼は自叙伝的に自己の姿を過去と現在、さらに未来にわたって確認してくれるような作品の成功に現在の「非生活」の打開、真の生活の展開を期待していた。それは「絶望」にもとづいた外面的には貧しい精神生活の展開をまず意味している。しかし、それに留らずにカフカは息子として父親の権威のもとに喘ぐ生活より逃れて大都会に行き、作家として自立の生活を得ることを、さらに人並みな結婚の道が開くことをさへ望んでいたのである。それは故郷の閉塞を去って新世界に向う移民の願望と同じであった。そして、このような点より見ると、カフカの「絶望」の追求は「願望」に手段としてつかえているのではないかとほとんど見える程である。

このように日記において孤独に集中された自己の追求にも拘らず、カフカは「Bauernfänger」の試みにおける様な「絶望」と「願望」とのやりとりより抜け出る事が出来なかった。彼は逃走の衝動を克服して、不幸なる存在の意識を自らに引き寄せようとした。しかし、それは「願望」によって復讐を受けた。「願望」はカフカの中で折角生じかけた不幸なる存在としての自己像を非人間的なものに、笑止なものに、非現実的なものに変えてしまい、また、「絶望」



を単に冷やかな自己没頭と貶めてしまい、カフカがそれを荷う事を妨げたのである。

これはカフカの詩人としての将来の見込みを暗くするのに十分であった。しかしなお、彼は自分の苦悩の中に表現されるに値するある精神的現実が存在するのを知っていた。すなわち、「願望」によって見失わされながら、なおある「絶望」の現実が存在するのを知っていたのである。しかし、カフカはそれを表現するのに必要な正しいペルスペクティブを、特に彼のごとく作品と自己の生をかなり直裁に密着させる傾向のある作家にとって必要である、主人公の小説における正しい位置づけをまだ見出していなかった。主人公を「絶望」の意識に密着させる事は自叙伝の試みにおけるように失敗におわらざるを得ない。主人公を「願望」と「絶望」の間に置く事は Banernfänger の試みで見られたように、果しない逃亡の試みとなり、「願望」と「絶望」の両者より真摯さを失わせてしまう。それ故、これら二つとは異った新しい精神的構成が必要であり、それを見出す事がとりもおさず新しい道の打開であった。

日記の始まりより「死刑判決」の成立までの期間は日記の分量の豊富なのに比べて成果のきわめて乏しい時期であった。カフカはその間ずっと道の打開を彼の孤独な自由の内部においてのみ求め続けていたが、やがて、彼は自分が詩人の自由を夜々行使し、また発想も豊かに所有していながら、不毛の底に沈まねばならないのは何かひとつ条件が欠けている故であると考え始め、そして、その条件を勤務生活よりの解放であると信じた。すなわち、勤務生活の浸蝕より精神を守る事は結局彼の虚弱な体をもってしては力に余る事であり、勤務生活さへ除かれればおのづから彼は例の自叙伝を、現在では夢を書き留める時にのみそうであるように、滑らかに書き進めることが出来、しかも他の人間達に理解され得るのだと彼は確信したのである。しかし、勤務生活を続ける限りは満足な作品は書けないと考えながら、彼は何か満足なものを書かぬ限り勤務生活を捨てる事は出来ぬという矛盾した考えに固執した。それ故、彼の真の処女作はやはり彼の孤独の内部より生じなくてはならなかった。

しかし、最初の作品は外側よりのきっかけなしにカフカの孤独の内部で自然に結晶したのではなかった。彼が日記において相変らず空を探っていた頃、1912年8月13日、カフカは F. B. なる女性に始めて出会った。この女性は後に2度にわたる婚約と婚約解消という体験を通じてカフカの自己把握に決定的な影響を与え、「審判」や「城」の成立に至らせた女性である。しかし、出会の日より「死刑判決」の成立の日まで日記においてはこの女性についての注目すべき記述はなく、一切が以前と同じ低迷を続けている。唯、9月16日、彼の妹の婚約に際して「困憊の底より我々はまた新しい力を得て浮び上る。暗黒の神々は子供らの弱り切るのを待っている。」<sup>(9)</sup> という意味深い予感に満ちた詩があ

り、それに加えてたった一行《Die Vorahnung des einzigen Biographen》という言葉があるのが注目される。それから約1週間後、9月23日の夜より翌24日の明け方にかけて「死刑判決」が日記のノートに一気に書かれた。カフカはその日の日記内で「死刑判決」を疑い得ぬ作品と認めた。そして、翌日より翌年の2月中頃まで日記は欠け、その間に日記のノートに「火夫」が書き込まれ次いで別の用紙に「変身」が書かれた。さらにおよそ4ヶ月半後、「死刑判決」の校正刷が出来た折に、カフカは一夜の内に夢のように一気に捕えられた作品の自己解釈を試み、そして作品に彼よりの「正式な誕生」(Die regelrechte Geburt)を認めた。<sup>(40)</sup>

「死刑判決」はカフカの長い低迷を破り、カフカ的な文学へと最初の道を開いた作品であり、また彼の求めていた「自叙伝」のひとつの成就を意味していた。それは単一の出来事に集中された40ページ足らずの短篇でありながら、その内容において自叙伝的なひろがりをもっている。カフカが「自叙伝」において生い立ちより起して展開しようとした様々なテーマ、父との関係、ネガティブな自己の本質と結婚や独立への願望、不安と罪なき者の罪意識等々が単一の出来事の展開の内に夢においてのみ可能なような簡略さをもって包括されている。

それでは如何にして今まで不可能であった自己の現実の描出がこゝで可能になったのだろうか。それはまずカフカが彼の主人公を精神的な意味で正しい位置に置いた事であった。先の自叙伝において少年はネガティブな自己についての意識に余りに冷やかに密着してしまった故、その存在の生々しさを失ってしまった。「Banernfänger」の試みにおいては、「私」は「独身者」と「正しい人々」の集りが催されている建物との間におかれて、一体「独身者」を振り切る真剣さがあるのか、それとももう絶望的に彼のものになってしまったのか判らぬような、戯れじみたやりとりを果しなく続けている。それに対して「死刑判決」においては、カフカは主人公ゲオルク・ベンデマンの「独身者」を彼の失われた友人として彼の身辺よりはるか遠くロシアにまで退けてしまったのである。すなわち、主人公がかつて大いに傾倒して、父親に逆ってまで友情を示したこの「一風変わったところのある」友人は故郷を出奔してロシアに去り、そこで決定的な事業の失敗をなめて今や惨めな「独身」の生涯を運命づけられている。そして一方、主人公のほうは故郷に残って勤勉な息子として次第に父親から商売の実権を受け継いで、現在では幸福な婚約者として結婚生活を、それに父親からの完全な独立を目前にしている。主人公を実際的にロシアの友人と結びつけているものはいまではいよいよまれな文通より他にない。しかも、友人の手紙には友人がもはや故郷の現実を完全に見失っている事が明白に表われており、主人公はただ救い難く失われてしまった者への当惑の混った配慮よりお座なりな文通を維持しているのに過ぎない。彼は彼の婚約を友人に知らせないまゝで

いる程である。

このようにカフカは「故郷」に残った人間のほうにはっきり視点を定めたのである。主人公ゲオルク・ペンデマンは「Bauernfänger」の「私」と違って、逃亡の苦しみの覚えもなしに何時の間にか幸福な市民になっており、自らの不幸な本質に従って故郷を出奔した友人の没落を、どうにもならぬ遠方の出来事として当惑をもって眺めている。しかし、果して彼は自分で思っているほど十分に市民としての生存権利を確保しているのだろうか。自分で思っているほどにロシアの友人とすでに縁遠くなってしまっているのだろうか。こゝにこの小説の視点が置れている。すなはち、カフカは主人公が現在の幸福な状態においても彼が意識するよりはるかに強く遠方の友人と結び付けられている事を指適するのである。まず、彼の深い満足感において。友人の事を考える事は彼の満足感をいよいよ深くする。何故なら、友人の不幸が彼に自分の生き方の正当さを確信させるというばかりでなく、不幸になった友人を遠方に見捨てておくという事は彼の父親への恭順の証しを立て、父親の好意をいよいよ確実にすると彼は感じるからある。しかしまた、不安において。彼の深い満足感の中には一抹の罪悪感が混っており、それによって不安が醸し出され、彼をして満足を確める必要以上に友人の事に思い耽けらせるのである。彼が彼の許嫁に、結婚を知らせたくない友人が一人いると告げた時、彼女は不可解にもその友人に深い関心を抱いて、「あなたにそんなお友達があるのなら、ゲオルク、あなたは婚約なぞすべきじゃなかったのよ。」と彼に迫り、彼の不安はあらわになる。そして、不安に促されて、彼は友人に婚約を知らせる決心をするのである。

しかし、不安は幸福感の中に溺れて、ただ全体として甘美な物思しさが彼を包んでいるに過ぎない。その中で彼はゆっくりと手紙を書き、ロシアの友人に、彼はもはや唯の友人ではなくて幸福な婚約者である事をはっきり知らせる。そして、書き上げた手紙を携え、まだ残る不安を振り払う為に父親の処に何らかの承認の印を求めに行く。ところが、彼が今や従順な息子としていさゝかの後めたい良心もなしに父親の前に立った時、物語は急激に新しい展開をとげ、彼は憎悪に満ちた父親より、あのロシアに失われた男こそ父親のいはば心の息子であり、彼ら二人はとうからゲオルクに対して同盟を結んで機会をうかがっていたのだ、と宣告される。そして、それに次いでたちまちには彼は両親への罪のため、友人への罪のため、父親より死刑判決を下され、すこしの抵抗もなく自ら家を走り出し、近くの橋より投身するのである。

父親の宣告した死刑判決は次の通りである。

「自分の他に何があるのか今こそお前は思い知っただろう。今までお前は自分の事しか知らなかった。本当は、お前は罪のない子供なのだ。しかし、もっと本当の事をいえば、お前は悪魔のような人間なのだ。だからよく聞け、私はお

前に溺死刑の判決をくだす。」

この死刑判決こそ、カフカが始めて自ら正当と認めた自己把握であり、カフカ文学の出発点になったものである。「Bauernfänger」や自叙伝における失敗の後、カフカは彼にとって真に精神的現実である「絶望」を定着することに成功した。それは「願望」に駆り立てられ、罪ある自己についての意識を、すなはち「絶望」を繰返し失う人間の中になおかつ存在する「絶望」であった。ロシアへと出奔せざるを得なかった男の「心の兄弟」であるゲオルク・ベンデマンは幸福な市民たらむという願望のため自分を罪なきものと思い込み、事実、不安のさゝやきに苦しめられることがなければ完全に無邪気な人間として、結婚と独立の目前までやって来る。そこで罪意識を全く欠いた彼の心に有罪判決となり響くのである。それはまず何より彼が精神的に自己の本質を裏切った事であり、次いで、彼がなおかつ無意識に、それ故一層無制限に自己の本質に従って、親しい人々を精神的に苦しめた事である。しかし、このような有罪判決は罪意識を欠いた彼にとっては甚々しい不条理としてしか体験されない。だが同時に、彼の意識の空白はこの不条理に抵抗出来ない。不安がたちまち空白を満して、このある筈もない罪について彼を納得させてしまう。これがカフカの定着した「絶望」であり、後のカフカ文学、特に「審判」や「城」の基調をなす体験なのである。

この様な「絶望」と罪の形態は現代においてようやく明白な体験の現実となったものであるが、カフカはそれを小説において最初に定着するまでに日記が始まって以来2年余り、実際には恐らくそれ以上長くにわたって、書く事の不能に耐えねばならなかった。それは真に「コロンブスの卵」的な功績であった。すなはち、絶望を失う事がなおかつ絶望であるという認識自体はすでに19世紀中頃にキルケゴールによって思维的に得られていたのである。ただ、精神的現実をまだ十分に把握していたキルケゴールはこの絶望の形態を精神的に最低の段階のものとして、容易に克服し得るものとして、イロニーをもってしか語り得ぬものとして差し示し、通り過ぎた。彼の本来の関心は自己についての意識のもっと高まった、孤独な精神化の果てにおける絶望の問題に向けられていたのである。そして、世紀末より世紀始めにかけてこのような「絶望」を求める精神は、キルケゴールよりの直接的な影響の有無に拘らず、自己についての尖鋭な意識を求める様々な態度の中に、様々な精神的高貴さの追求やペシミズムの中に生きていた。しかし、キルケゴールのそれを始めとしてこれらの「絶望」の追求は形面上的な体験、特に神体験に最後の現実の保証を得ていたのであり、それ故、神体験が失われ、それを中核としたイデーの現実が失われた時には、「絶望」の追求はただ苛酷な自我至上主義の恣意に接するのである。そしてそれと同時に、今まで精神的に克服されていた「願望」が同じ恣意を回

復し、恥辱として、下からの浸蝕として精神を脅かすのである。人は「願望」によって自己を繰返し駆り立てさせてはならぬわれを再び見出せなくなる。勿論、この様な精神的現実の危機に精神の側より直面した思想家達、詩人達は多い。彼らは精神の崩壊の危機に早急に促されて、様々なニュアンスを持った思想や象徴を展開した。しかし、カフカの如く精神的現実の崩壊を直接に書くことの不能として、思考を展開させることの不能として受け止め、その不能の中に自己をゆだね、なおかつ新しい生成を願った作家はすくなかった。それを可能ならしめたのはカフカにおいて並はずれて著しい、精神的現実を脅かす恣意への感覚、洞察力であった。それによってカフカは明晰な思考が行うのと一風別なやり方で幻滅を次々に引き寄せたのである。しかし、「お話しにならぬ」状態の認識にも拘わらずなお彼をして倦きずに新しい現実の把握へと向わせたのは彼の中の「願望」の力であった。すなはち、彼が人間を屈辱的に駆り立て続ける不条理な「願望」を根本においては精神的にも拒絶しなかった事であった。「死刑判決」によってさへカフカは精神的な決着をつけてしまわなかった。彼は「死刑判決」によって一度確認された「絶望」に固着してしまう事なく、繰返しそれを「願望」によって失わせた。すなはち、「死刑判決」かその成立をF. B. なる女性の出現に負っている事を、また小説において父親より否認される許嫁が他ならぬF. B. に連らなっている事をカフカは小説の成立直後にはっきりと自分確認したにも拘らず、小説の成功は彼に小説家としての可能性を確信させ、F. B. との結婚と独立を望ませたのである。F. B. との婚約破棄という体験はカフカの内にあるネガティブな自己についての意識を育てた。しかし、それによって彼は再びF. B. との結婚を試みる事を妨げられなかった。そして、二度目の婚約破棄も三度目の別の女性との婚約を、さらに、その失敗もミレナなる女性との恋愛を妨げる事にならなかった。「父への手紙」や「ミレナへの手紙」の中で見られる苛酷に保たれた自己意識もたちまち「願望」の浸蝕にゆだねられる。そして、「審判」や「城」に見られ、カフカ文学の根柢のリズムをなす「そしてさらに、またさらに」(Und so weiter, weiter)という言葉に見られる、果しない反復が続くのである。しかし、そのようにしてカフカは「恐怖と戦慄」をもたらす精神の問題を日常的な心の動きの中に現実化する事が出来たのである。

# 注

- (1) 「ある闘争の記録」(Beschreibung eines Kampfes) 第2章 Belustigungen oder Beweis dessen, daß es unmöglich ist zu leben.

Seite 26, Franz Kafka/Gesammelte Schritte IV, herausgegeben von Max Brod, Schocken Books. 1946

- (2) カフカの短篇集「観察」"Betrachtung"の最後の文章"Unglücklichsein"

- (3) 日記 Saite 12, Franz Kafka/Tagebücher, Max Brod, Fischer Verlag, 1954
- (4) 同上
- (5) 日記, Seite, 15, Dezember, 1910
- (6) 日記, Seite 17,

この試みの圧縮されたものが「観察」の《Entlarvung eines Bauernfängers》。  
同時に Beschreibung eines Kampfes に関係があるというのは編集者 Max Brod の  
説。なお Bauernfänger というのは直訳すれば、「百姓釣り」、すなわち、都会へ出  
て来た素朴な田舎者をだます詐欺師

- (7) 日記, Seite 222~227. 30, Dezember, 1911. /2, Januar, 1912
- (8) Der Heizer, 長篇「アメリカ」の第一章
- (9) 日記, Seite 290, 15, September, 1912
- (10) 日記, Seite 206, 11, Februar, 1913